

VII F D 活動

全学日本語教育部門では、「日本語表現 T1」「日本語表現 T2」の授業改善・情報共有の一環として独自の授業アンケートを実施し、分析結果に基づいて授業内容・方法を修正したり、授業実践報告会を開催して授業の研究成果を学内に公開したりしている。本章では、部門がおこなっている FD 活動の概要とその成果について報告する。

1. 授業アンケート

（櫛井亜依）

1-1) 概要

1-2) アンケートの結果

1-3) 分析および今後の課題

2. 授業実践報告会

（外山敦子）

2-1) 概要

2-2) プログラム

1. 授業アンケート

1-1) 概要

全学日本語教育部門では、本部門独自の授業アンケートを実施している。平成 23 年度前期に試験的に導入し、内容を大幅に見直したうえで、平成 24 年度前期以降「日本語表現 T1」「日本語表現 T2」を対象として継続的に実施している。実施の要領は表Ⅶ-1 のとおりである。

部門独自のアンケートは、本学 FD 委員会が実施する「授業に関するアンケート」とは別におこなっている。「授業に関するアンケート」では、履修者の意見や要望を集約することで、教員と学生とのコミュニケーション・ツールの一つとして活用することにより、学生が納得して授業を受けられるよう企図されたものである（「学生による『授業に関するアンケート』実施のご案内」より引用）。これに対し当部門アンケートでは、学生自身が半期の取り組みをふりかえり、自分で受講の成果や今後の課題を導き出すことを主な目的としている。

質問項目は以下の通りである。なお経年変化を分析するため、平成 24 年度以降変更を加えていない。

表Ⅶ-1 授業アンケート概要

目 的	①授業内容および指導方法の改善に役立たせる。 ②学生に本授業の意義を追認させ、学修内容の継続的な実践を促す。 ③授業実践の成果を部門内で共有、部門外へ発信する。		
実施日	講義第 15 週（前後期共通）		
対 象	「日本語表現 T1」「日本語表現 T2」受講者全員（再履修クラスを除く）		
方 法	無記名、選択式・記述式併用		
内 容	①学修の内容に関する質問 ②学修の効果に関する質問 ③学修の継続に関する質問 ④総合的所感		
回答数 (人)		日本語表現 T1	日本語表現 T2
	H24	2,133	1,359
	H25	2,294	未集計

【参考】アンケート質問項目「日本語表現 T1 をふりかえって」（全文掲載）

「日本語表現 T1」の学修内容およびその成果を振り返り、以下の質問について、別紙に回答を記入してください。

質問 1

これまで、本授業での学修内容が、本授業以外の場面で役に立った経験はありますか。次の 1～2 から該当するものを選び、番号で答えてください。

1. 経験がある → 質問 2 へ
2. 経験がない → 質問 4 へ

質問 2 ※質問 1 で「1」と答えた人のみ回答

本授業での学修内容は、本授業以外のどのような場面で役に立ちましたか。次の 1～24 から該当するものを選び、番号で答えてください。（複数回答可 3 つまで）

【授業】

1. レポート・小論文の作成
2. リアクションペーパーの記入
3. プレゼンテーションの資料作成
4. プレゼンテーションの口述説明
5. 論述式テストの記述
6. ディスカッション・ディベートを含む意見交換
7. 卒業論文の作成
8. 資格取得・検定試験対策
9. その他

【社会生活】

10. (授業以外の) レポート・小論文の作成
11. (授業以外の) プレゼンテーションの資料作成
12. (授業以外の) プレゼンテーションの口述説明
13. (授業以外の) 論述式テストの記述
14. (授業以外の) ディスカッション・ディベートを含む意見交換

15. コンクールや新聞などへの投稿
16. 履歴書・エントリーシートの作成
17. ビジネス文書の作成
18. 面接の応対
19. 電話の応対
20. メール・手紙の作成
21. 連絡、報告
22. 目上の人との会話
23. 友人や家族との会話
24. その他

質問3 ※質問1で「1」と答えた人のみ回答

質問2で回答した場面において、具体的にはどのように役に立ちましたか。下記の〈例〉にしたがい、質問2で回答したそれぞれの場面について詳しく書いてください。

→ 〈例〉省略

質問4

今後、本授業で学んだ内容はどのような場面で役に立つと思いますか。次の1～24から該当するものを選び、番号で答えてください。（複数回答可5つまで）

→ 選択肢は**質問2**に同じ

質問5

本授業を受講してあなたが修得したことは何ですか。そして、まだ修得していないことは何ですか。それぞれについて、次の1～12から該当するものを選び、番号で答えてください。（複数回答可それぞれ3つまで）

1. 原稿用紙をルールに従って使用すること。
2. 語句を正しく表記し、意味に即して正しく使用すること。
3. 適切な文体を考えて文章を書くこと。
4. 文法的に適切であいまいさのない文章を書くこと。
5. 分かりやすい説明を工夫して文章を書くこと。
6. 適切な構成やすみちで文章を書くこと。
7. 事実と意見とを区別すること。
8. 他人のことばと自分のことばとを区別して文章を書くこと。
9. 適切な根拠（事実）を示して自分の意見を述べること。
10. 正確な事実に基づき、それを適切に説明・分析すること。
11. 論理展開に一貫性や妥当性のある文章を書くこと。
12. 調査した内容を活用しながら文章を書くこと。

質問6

今年度後期に「日本語表現 T2」の受講を希望しますか。

1. 希望する
2. 希望しない

質問7

本授業を受講した感想を、自由に述べてください。

質問8

来年度の受講生に向けてのメッセージを記入してください。

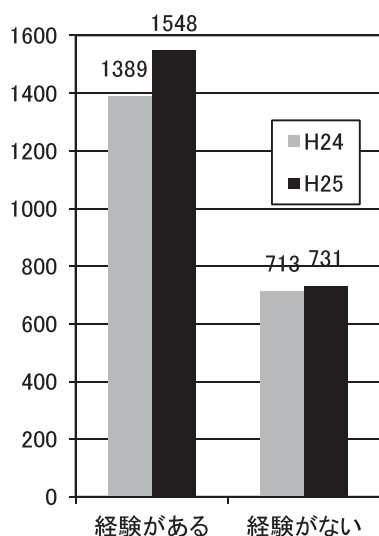
以上

1-2) アンケート結果

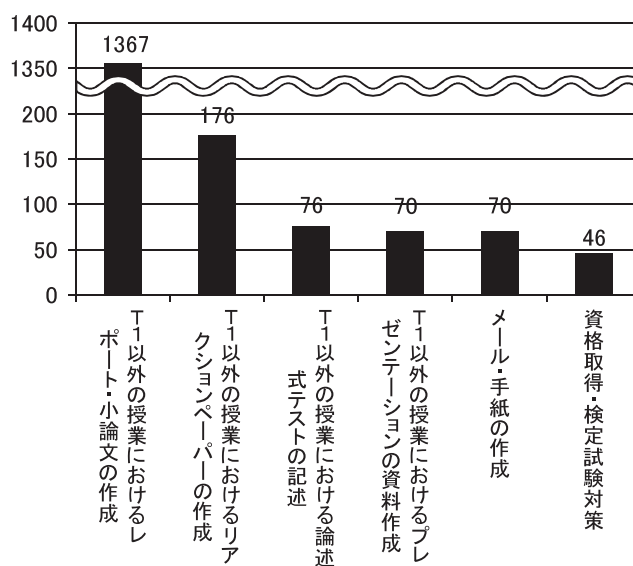
1-2-1) 日本語表現 T1

以下、平成 25 年度に実施した結果および分析を中心に報告する。

図Ⅶ-1 のとおり、本授業が役に立った経験があるか否かという問いに対し、「役に立った経験がある」という回答数は2年間で増加している。割合で見ても、平成 24 年度が 65% であったのに対し、平成 25 年度は 68% と 3 ポイント増加している。また、具体的に「役に立った場面」について質問したところ、平成 25 年度においては図Ⅶ-2 のような結果が得られた(上位 6 項目を抜粋)。「レポート・小論文の作成」に回答が集中しており、平成 24 年度も同じ傾向を示している。



図VII-1 T1での学修内容が本授業以外の場面で役に立った経験の有無(単位:人)



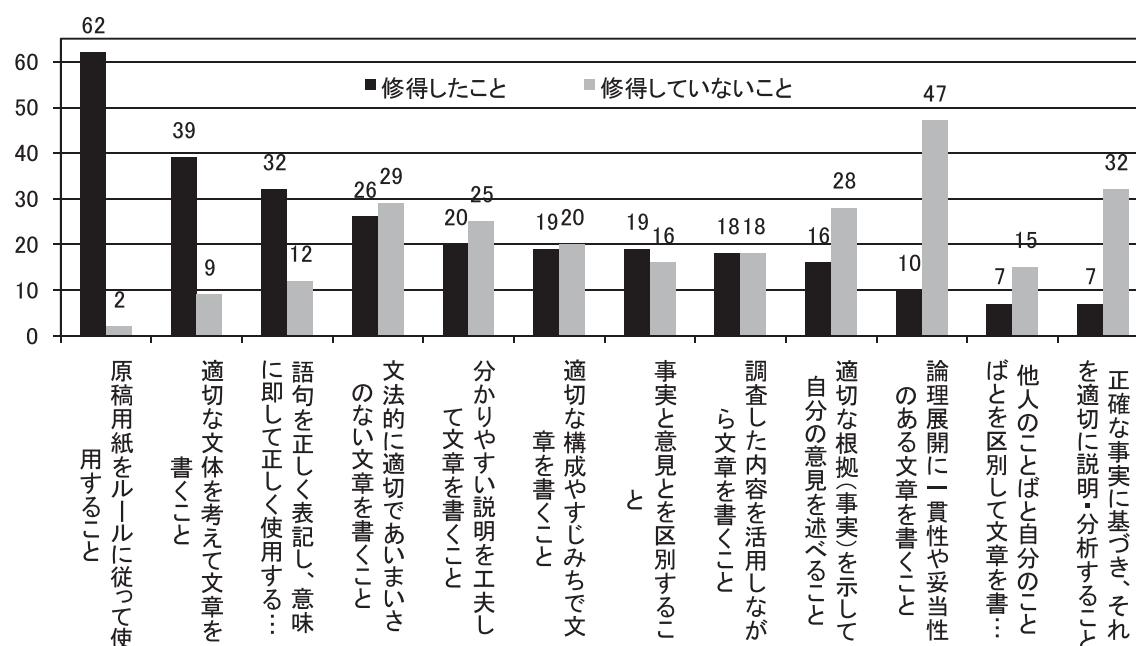
図VII-2 T1の学修内容が役に立った場面(一部抜粋/単位:人)

なお、役に立った場面についての具体的記述は、以下の通りである(一部抜粋)。

- 不適切な文法や表現に注意してレポートを書くことができた。
 - 事実→分析→意見の骨組みで説得力あるレポートを作成できた。
 - ゼミで論文を読むとき、小論文を書いた経験を踏まえると、反論→再反論などの構造がスムーズに理解できた。
 - 本を読んで筆者の考えをもとに自分の考えを述べるレポートが課されたとき、他人の意見と自分の意見とを区別して書くことができた。
 - アルバイトの接客で理由を伝えるとき、事実に基づいて説明したら納得してもらえた。
 - SNSで友人に連絡するとき、正確な文章を心がけたら、たがいに誤解がなくなった。
- ここからは、何かを「書く」という場面だけでなく、「読む」場面、「話す」場面においても本授業の内容が活用されていることが分かる。

次に、学生が本授業で修得した(まだ修得できていない)と考える学修事項については、**図VII-3**のような結果が得られた。

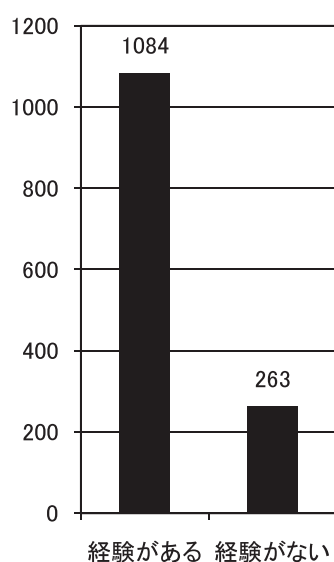
ここから、表記・表現に関しては修得したという実感が強いことがうかがえる。一方、論理的思考力に関してはまだ修得していないという意識が強い。これは学生の自己評価であるため、実際の能力との相関関係は不明であるが、「修得したこと」「修得していないこと」のどちらの項目においても、数値が高いものは授業で学生に意識させることができた内容であるといえるだろう。そのような意味で問題視すべきは、「修得したこと」「修得していないこと」の両項目で数値が低いものである。指導改善のためには、このような項目に着目していく必要がある。



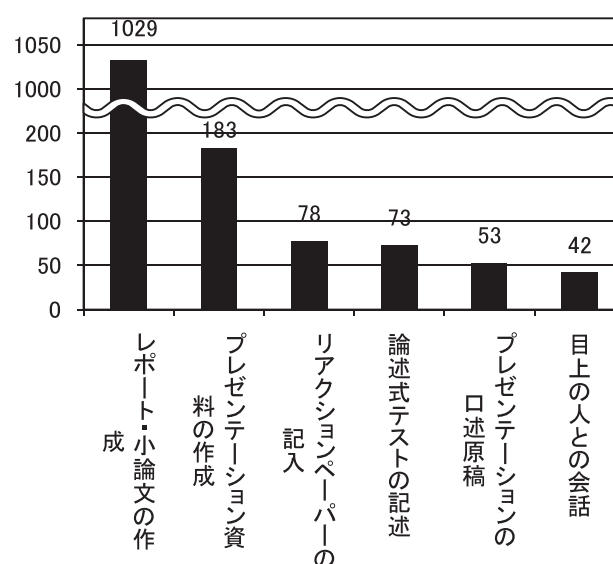
図Ⅶ-3 T1 で修得したこと／まだ修得していないことは何か(単位: %)

1-2-2) 日本語表現 T2

以下、平成 24 年度に実施した結果および分析を中心に報告する（平成 25 年度結果は未集計）。



図Ⅶ-4 T2 での学修内容が本授業以外の場面で役に立った経験の有無(単位: 人)



図Ⅶ-5 T2 の学修内容が役に立った場面(一部抜粋/単位: 人)

まず、図Ⅶ-4のとおり、本授業が役に立った経験があるか否かという問いに、「経験がある」と答えた学生は全体の80%にのぼった。また、それがどのような場面であったかを尋ねたところ、図Ⅶ-5のような回答が得られた。「レポート・小論文の作成」に回答が集中しており、これは全体の76%にあたる。そして「プレゼンテーション資料の作成」がそれに続く。

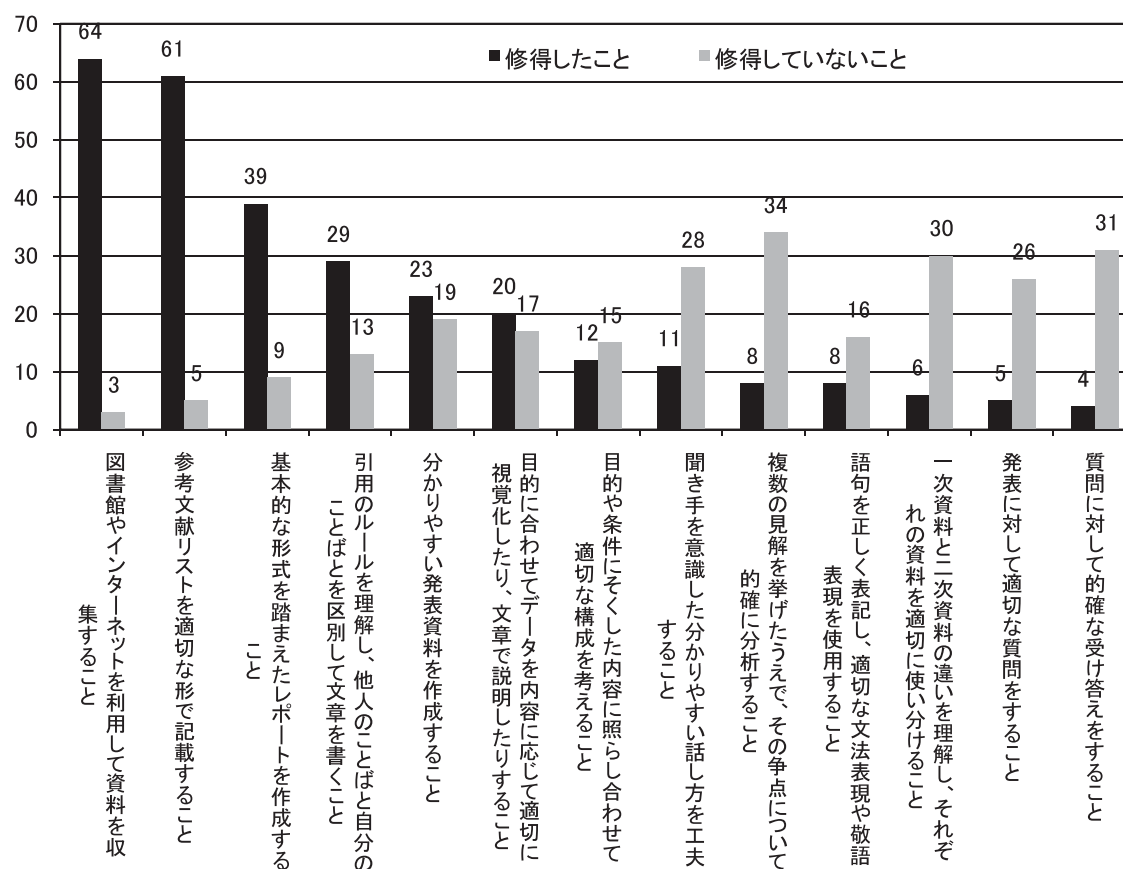
なお、以下は「役に立った場面」に関する自由記述である（一部抜粋）。

- 発表するとき、説明の順番、構成や話し方、伝え方に気を付けるようになった。
- プレゼンテーションでグラフの説明をする場合、注目してほしい部分に目印をつけた
り、グラフから読み取れることを書いたりして工夫することができた。
- 授業で課されたレポートを書く際、レポートの目的を明らかにしたり、章の構成を考えたりするときに役に立った。
- 他人の文章を適切に引用し、自分の意見と分けてレポートを書くことができた。
- どのような資料がプレゼンに有効的に使用できるか、また引用や著作権を気にして発表準備をすることができた。
- インターネットを介した情報収集において、情報の出所がきちんと書かれていなければ、容易に信用しないようになった。
- アルバイト先（予備校）において、ある提案に対する生徒の賛成・反対意見を分かりやすく説明することにより、討論がスムーズに行われた。
- 家族間での祖母の遺産の扱いについて、自分の親側の意向と、親戚側の意向の食い違いがよく分かった。

「日本語表現 T2」では、資料収集や引用の方法を授業で取り扱うが、作業手順だけでなく、メディアリテラシーについての意識の定着がうかがえる回答が散見された。また、複数の見解を整理・分析するという学修経験をふまえて日常生活の中で実践しているようである。

次に、学生が本授業で修得した（まだ修得できていない）と考える学修事項については、図Ⅶ-6のような結果が得られた。

「修得した」と受講生が考えることとして上位にあがっているのが、資料収集の方法やレポートの書式についてである。このようなスキル項目が上位となる傾向は、「日本語表現 T1」と同様であるといえる（図Ⅶ-3）。また、これらはテキストに手順や書式例が詳細に掲載されているため、それを確認しながら実践できたことが自己評価につながったのではないかと推測される。一方、図Ⅶ-6で「修得した」と回答した学生が少なかった下位の3項目については、テキストに説明などの記載がなく、発表に対する質疑応答の過程で適宜指導を行ったものである。これらの項目は「修得していないこと」の割合も高い。もちろん、これらの項目も状況に応じた思考力が問われるものであり、短期間に修得できる学修内容ではないことが原因であるとも考えられる。今後は、学修内容の一つとしてテキストにも明記するとともに、教員間で方針を定めて指導していく必要があるだろう。



図Ⅶ-6 T2で修得したこと／まだ修得していないことは何か(単位: %)

1-3) 分析および今後の課題

アンケートの結果から、受講生の多くは他授業において本科目で獲得したスキルを積極的に活用していることがわかった。特に表記・表現のルールなどの技術的側面を修得したという実感が強いようだ。一方、小論文の論理展開や議論の争点分析など、論理的思考に関わる点は、まだ修得できていないという意識が強い。つまり、日本語運用力とされるものの中には、短期間で獲得できるスキルとそうでないスキルとがあり、スキル獲得に時間を要するものは、本科目受講終了後の継続学修こそが最も重要である。学生にそうした認識を促す機会を提供できたことが、このアンケートの成果であるといえる。

今後の課題は、学生の修得度をより正確に把握するための質問項目の見直しである。例えば、現行では各スキルの修得度を「修得した／していない」のいずれかによって回答させているが、修得状況を段階別に細分化することで、より精緻な分析が可能になるだろう。学生の実情にあわせた授業改善のため、本調査の果たす役割は一層大きくなると考える。

2. 授業実践報告会

2-1) 概要

本部門では開設初年度から、教員の創意工夫による教材の充実や授業方法の提案、受講アンケートの実施など、授業改善を目的とした様々な取り組みを積極的におこなってきた。

こうした取り組みを学内に公表する機会として、平成24年度から「全学日本語教育部門授業実践報告会」を開催している（年1回）。授業実践報告会では、全学必修科目である「日本語表現 T1」およびこれに準ずる「日本語表現 T2」の授業内容ならびにその成果の報告や、担当教員別の授業実践・研究成果を発表する。こうした機会は、部門教員の教育研究能力の向上にも資するものである。

図Ⅶ-7 平成25年度授業実践報告会開催チラシ

2-2) プログラム

2-2-1) 平成24年度（通算第1回）

日時	平成24年8月24日（金）第1部 14:00～14:30、第2部 14:30～16:00
会場	長久手キャンパス8号棟4階会議室
プログラム	▶第1部：平成24年度授業報告会 全学必修科目「日本語表現 T1」実施報告（外山敦子） ▶第2部：実践報告・研究発表会 学修成果の記述による教育的効果（入口愛） 小論文作成における協同学修の試み—互惠的なテーマ理解のために—（森本俊之） 「日本語表現」科目の現状と課題—受講アンケートの分析を通して—（櫛井亜依）
参加人数	22人

第1部では、平成24年度「日本語表現 T1」における授業の取り組みと受講の成果および課題について報告した。本科目が学術的文章を書くための技術修得に力点を置いていること、その実践として半期で計3本の小論文を書いていることを報告し、実際の小論文を示しながら、



図Ⅶ-8 平成24年度開催の様子

学修のプロセスを説明した。

第2部は、「日本語表現 T1」における個別の授業実践について、3人の教員が報告した。

「学修成果の記述による教育的効果」（入口）では、提出用紙末尾「本時の学修成果」欄への継続的な記述が、文章作成にどのような効果をもたらしたのかについて、事例を挙げながら報告した。

「小論文作成における協同学修の試み—互惠的なテーマ理解のために—」（森本）では、小論文執筆前に必要な情報収集（関連文献の精読）に、ジグソー学習法を取り入れた成果と課題とについて、学生へのアンケート結果に基づいて報告した。

「「日本語表現」科目の現状と課題—受講アンケートの分析を通して—」（櫛井）では、平成23年度「日本語表現 T1」で実施した受講アンケートの概要と結果の分析を報告した。学生は、本科目の学修内容と方法についておおむね適切であると評価しており、文章表現力の向上を実感していることが明らかになった。

2-2-2) 平成25年度（通算第2回）

日時	平成25年9月3日（火）第1部 14:00～14:30、第2部 14:30～16:00
会場	長久手キャンパス研究棟2階 K1 会議室
プログラム	▶ 第1部：平成25年度授業報告会 「日本語表現 T1・T2」実施報告（外山敦子） ▶ 第2部：実践報告・研究発表会 話しことばの修正における「語レベルの言い換え」への依存 —オノマトペ由来の連用修飾表現「しっかりと」の使用から—（深津周太） 小論文における論証の評価方法について—語用論の見地から—（森本俊之） ピア活動の効果を高めるグループ編成—小論文のグループ添削における実践を通して— （外山敦子）
参加人数	23人

第1部では、平成25年度「日本語表現 T1・T2」における授業内容とその成果および課題を報告した。「日本語表現 T1」の特色として「ピア活動」を紹介し、文章の素材となるアイデアを幅広く導出するために、仲間同士で意見交換をしたり、草稿の段階で添削し合ったり、学生たちが積極的に関わり合いながら学びを深めている点を報告した。また、「日本語表現 T2」については、各自が勉強した内容を教え合う「ジグソー学習法」による文献精読の様子やグループ発表の授業風景などを報告したほか、到達度テストの結果や受講生の感想、次年度に解決すべき課題を具体的に挙げた。



図Ⅶ-9 平成25年度開催の様子

第2部「話しことばの修正における‘語レベルの言い換え’への依存—オノマトペ由来の連用修飾表現「しっかりと」の使用から—」（深津）では、オノマトペ（擬音語、擬態語）由来の副詞が学生の文章に多用されていることを問題視し、話し言葉を書き言葉にする際、語レベルではなく、句・文レベルでの言い換えの必要性を学生に気づかせるための授業内容の改善が急がれると指摘した。

「小論文における論証の評価方法について—語用論的見地から—」（森本）では、学生たちが授業課題として執筆した小論文を分析し、論証の評価方法を探った。自分の主張、主張の理由、理由を裏づける事実が論理的にまとめられているかを書かれた情報の質・量・一貫性から評価すること、適切な評価基準を設定するため複数の評価者によるクロスレビューが必要であることなどを提案した。

「ピア活動の効果を高めるグループ編成—小論文のグループ添削における実践を通して—」（外山）では、ピア活動に関する先行研究から「学力レベルが異なる学生同士のグループ」と「学力レベルが同じ学生同士のグループ」それぞれの長所と短所とを整理した上で、日本語表現科目におけるグループ学習ではいずれのグループでおこなうべきかという問いを立てた。そして、調査の結果「学力の異なる学生同士のグループ」の方が学修効果が高いことを明らかにした。



図Ⅶ-10 平成 25 年度開催の様子(発表者外山)



図Ⅶ-11 平成 25 年度開催の様子(発表者深津)



図Ⅶ-12 平成 25 年度開催の様子(発表者森本)



図Ⅶ-13 平成 25 年度開催の様子(質疑応答)